



パク ヤン ヘン  
**朴 洋幸**さん

(NPO法人トッカビ子ども会代表)



## 「異文化があってあたり前の 社会が、真の友情につながる」

### 国籍や民族名を隠して生きることの意味

大学時代、サークル活動のなかで在日の問題に関わることになったのが、朴洋幸さんと「トッカビ子ども会」（以下トッカビ）との出会だった。トッカビは、差別のために荒れる子どもたちをサポートするために、被差別部落で暮らす在日コリアンの活動として生まれた。朴さんにとって、子どもたちが民族名で名乗りあう姿がとても新鮮だった。

「ぼく自身は、19歳になるまで日本名を使っていました。小学校に入学した頃に母親から“韓国人だということと言ったらあかんよ”と言われたんです。韓国人だと名乗っていた同級生が差別的な言葉を言われているのを何度か目撃したこともあり、隠すことが自然と身につきました。

大学入学後、サークルの先輩に在日韓国人の父親がダンボール回収の仕事をしていることや母親が日本人であることを何気なく話したら、“その背景には、就職差別や結婚差別があったはずや”とまるで聞いてきたかのように解説されて驚きました。祖母に確かめると、確かに先輩の言ったとおりでさらに驚きました。

この時、隠すということしか考えてこなかったことが実はものすごく大きくて深い問題だと知りました。トッカビ出身の後輩が民族名を名乗っているのにも刺激を受け、民族名を名乗るようになったんです。」

韓国人であることを隠して生きることは、特別にしんどいわけではない。しかし保険証やパスポートなどが必要な場面では緊張を強いられる。「民族名を名乗ったのは、民族性や民族意識にこだわっているのではなく、もともとの名前です」と朴さんは言う。

### 異文化と接することで自分のルーツも振り返る

「今、トッカビには中国帰国者やベトナム難民として親とともに渡日した、あるいは親の渡日後に日本で生まれた子どもたちがたくさんいます。家庭生活にはベトナムや中国の文化が色濃く残り、多くの親たちが日本語を十分には理解できません。一方、学校で過ごす時間が長い子どもたちは自由に日本語を話し、日本の文化になじんでいきます。

そうすると子どもたちは成長するにつれて、日本語を話せない親を恥ずかしく思ったり小馬鹿にしたりするようになるんですね。一方で、子どもたちはよく“ベトナム語しゃべれるの？”“中国語、しゃべってみてよ”と言われます。日本で育った子どもたちにとって、なじみのない母国の文化を背負わされるのはしんどいものです。」

「自分は何人なんだろう？」と、子どもたちの気持ちは揺れる。差別を恐れる親の思いもあり、中学入学を機に日本名に変える子どももいる。「“隠して生きる”という意味では、まさに在日コリアンがずっと抱えてきた問題と同じだ」と朴さんは感じている。

日韓国交回復40年や「韓流ブーム」と言われているが、在日コリアンをはじめとした異文化が隣にあることに気づかないという日本社会の問題は歴然と存在する。

朴さんは実感をこめて、こう話す。

「自分とは違う文化や考えをもつ人たちがいます。そしてそれぞれ国や民族を背負っているのではなく、地域で一緒に生まれ育っているという意識が浸透していかなければ、真の共生や友情は成り立たないのではないのでしょうか。」